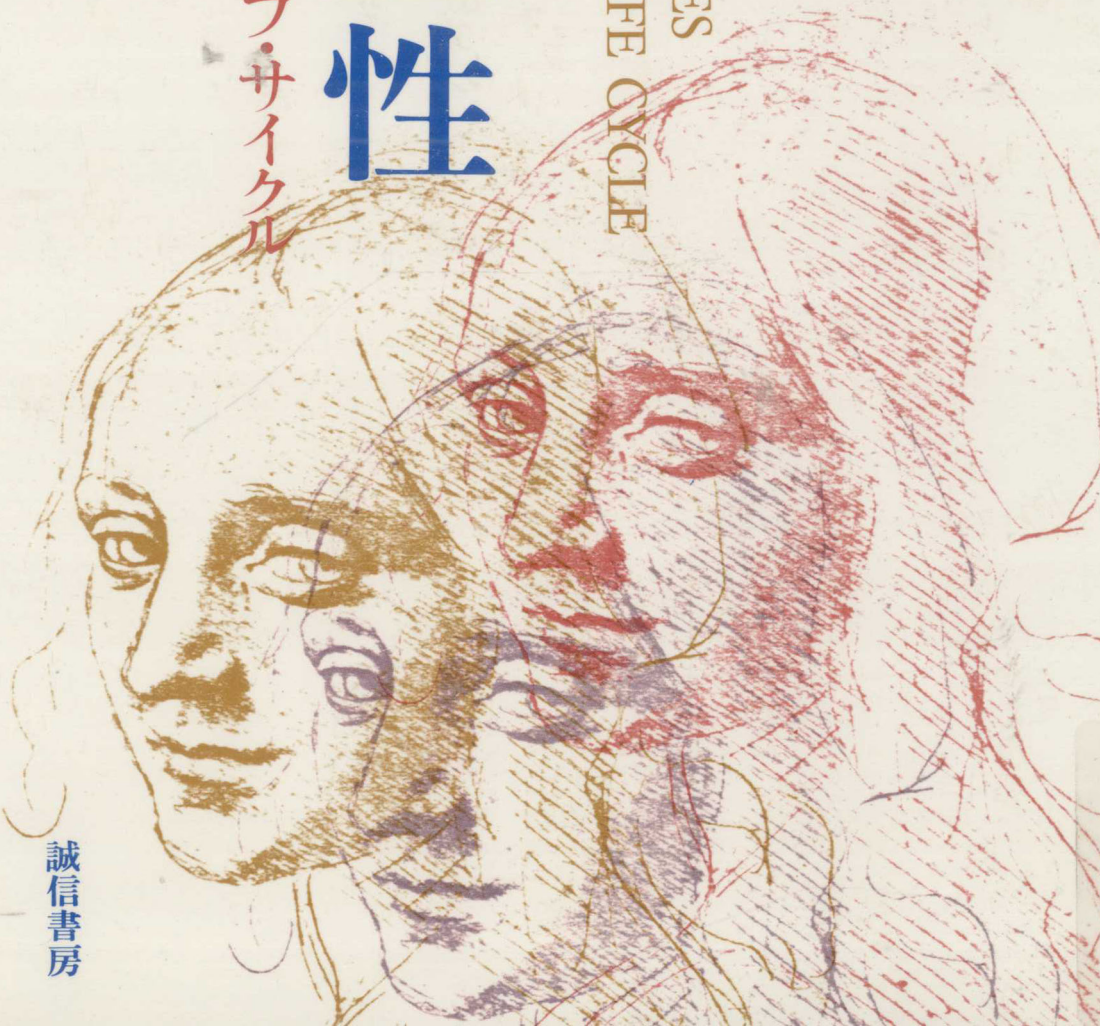
自我同一性

アイデンティティとライフ・サイクル

PSYCHOLOGICAL ISSUES
IDENTITY AND THE LIFE CYCLE

ERIK H. ERIKSON

E・H・エリクソン＝著
小此木啓吾＝訳編



誠信書房

PSYCHOLOGICAL ISSUES
IDENTITY AND THE LIFE CYC
ERIK H. ERIKSON

我同一性

デンティティとライフ・サイクル

ー・エリクソン＝著
本啓吾＝訳編

誠信書房

訳者紹介

小此木啓吾（おこのぎけいご）

1930年　東京に生まれる．
1953年　慶応義塾大学医学部卒．
専　攻　精神医学．精神分析学．精神身体医学．児童精神医学．
現　職　慶応義塾大学助教授．（医学博士）
著　書　現代精神分析　Ⅰ．Ⅱ．誠信書房
エロス的人間論　講談社現代新書．フロイト―その自我の軌跡―NHKブックス．自我と社会の出会い　日本教文社．

小川　捷之（おがわ　かつゆき）

1938年　北海道に生まれる．
1964年　東京教育大学大学院修了．（教育学博士）
専　攻　臨床心理学．
現　職　横浜国立大学教授．
著　書　児童臨床心理学事典（共編）岩崎学術出版社．
臨床心理用語事典（編）至文堂．
イメージの臨床心理学（共編）誠信書房．

岩男寿美子（いわおすみこ）

1935年　大阪府に生まれる．
1957年　慶応大学大学院卒．
1962年　エール大学大学院卒．（ph．D）
専　攻　社会心理学．
現　職　慶応義塾大学教授．
著　書　現代社会の社会学　世界書院．社会調査　学文社．
コミニケーション行動の理論　慶応通信．

エリク・H・エリクソン
「自我同一性」　アイデンティティとライフサイクル

1973年3月25日　初　版第1刷発行
1981年3月25日　初　版第11刷発行
1982年3月25日　新装版第1刷発行
1984年5月25日　新装版第4刷発行

定価は帯またはカバーに表示してあります

訳編者　小此木啓吾
発行者　柴田淑子

発行所　誠信書房
〒112 東京都文京区大塚3―20―6
電話東京 03(946)5666(代)
振替口座東京 4-10295

新興印刷　協栄製本

© 1973　検印省略
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

3311―415040―3825

序　文

すでに発表した諸論文を、改めて選集の形で刊行しなおす際には、それなりの十分な理由の説明を求められるのがならわしである。そして本書は、本『心理学双書』にかかわりのある各専門分野から永続的な評価を受け、研究資料としての需要が多い諸論文を収録することになった。

そもそも本書の題名（同一性（アイデンティティ）と人生周期（ライフ・サイクル））が、すべての課題を表わしている。つまり、その課題とは、人間のライフ・サイクルの統一に関する論議であり、個体の発達と社会組織の諸法則によって規定されたライフ・サイクルの各発達と段階それぞれに特有な力動に関する論議である。そして未だ精神分析は、この主題を、児童期を越えて扱ったことがなかったし、現在もなおごく少数の論文が、青年に固有な心理・社会的課題、すなわち自我同一性の形成を明確化し、これまでになされた研究を概観したのみで、未だそれ以上のことを意図することはできないでいる。したがって、編集者と著者は、とくに、デヴィッド・ラパポート（David Rapaport）に感謝している。なぜならば博士は、精神分析的自我心理学の歴史や私の恩師たちの研究の中に本書の課題を位置づける役割を果たすような包括的な論文を、本書の序章として掲載する許可を与えられたからである。しかしながら、この問題に対するラパポートの論究についてゆけるだけの準備を、これまでの勉学からとくに未だ整えておられないような読者は、むしろ、私の、より系統的でない諸論文を熟読された上で、改めて、ラパポートの論文にふれられることをおすすめしたい。

そこで次に、本書の各論文の特徴を明らかにすることによって、それぞれの論文の理論に対するかかわり方のちがいを説明しよう。

第一の論文（として選ばれた『臨床的考察』は、拙著『児童期と社会』より以前に著わされたもので、実際にはその著作に基礎的な研究資料を提供している）は、治療的臨床と、『応用的』研究から得られた印象の結びつきを具体的に例証している。そしてこの応用的研究こそ、一臨床家であった私に、その基本的前提の再考を促すことになったものである。しかもここでいう応用とは、インディアン教育、戦争下の研究、縦断的（継時的）な児童研究のような研究分野に、精神分析の仮説を適用させたという意味だけでなく、むしろそれ以上に、これらの各分野に固有な観察条件をともにわかちあうという意味である。そしてこの臨床家は、自分の観察上の習慣の中に暗黙のうちに含まれるようになった各理論とコミュニケーションをもったり、その助けをかりたりする挿話的な機会に恵まれるようになった。つまり、臨床以外の応用が臨床的な理論そのものに新しい視点を示唆することが、ごく徐々にではあったが次第にあきらかになったのである。

『「健康なパーソナリティ」の成長と危機』という論文は、全く別の試みから生まれた。つまり、一九五〇年の、ホワイト・ハウス・コンファレンスのために、児童期の精神衛生に関係のある実証された諸事実や有望な諸理論の概要をまとめるように、米国児童局に依頼された児童発達の専門家グループは、この目的のために、臨床家であり一市民である私に、私の著作『児童期と社会』が「健康なパーソナリティ」の発達について語っていることを、私自身が今になってどう評価しているかを、問いあわせてきたのである。そこで私は、理論の未熟さや、正常性の図式が誤用される可能性などに関する私自身の懸念にもかかわらず、あえてその懸念を抑えて、（一人の母親としての、そしてまた一教育者としての）ジョアン・エリクソン（Joan Erikson）の助力を得て、ある種の臨床的洞察にさらに推敲を加えた。当然、洞察というものは、一臨床家の仕事に統合されているわけであるが、この洞察を明確に概念づける場合には、その臨床家の意図に適ったものであればどんな実証可能な知識も、一貫した理論も、臨床方法も、見のがさずに包括せねばならない。（Erikson 1958 b 参照）本論文は、ホワイト・ハウス・コンファレンス準備研究グループに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

対して報告されているが、私は、従来の経験から見て、見のがされやすい特定の重要個所をイタリックにした。また幾つかの脚注を附することによって、本論文が、ひきおこしがちな誤用を戒しめることにした。

『自我同一性の問題』は、全然別の聴衆のために発表されたものである。つまり、米国精神分析学会のプログラム委員会は、私に、その年の冬季年次大会の一部門で、この主題について詳しく報告するように依頼してきたのである。そこで当然のことながら、精神分析理論とその治療技術についての論議が、ほかの論文の場合よりも多くなっている。ただしそうはいっても、ここでもまた私は、メタサイコロジイ上の諸問題は、この種の思索の専門家におまかせすることにした。

しかしながら、本書収録の三つの論文は、かえってこのようにそれぞれの形がちがうだけに、臨床的思索の互いに関連しあった三段階の歩みをよくあらわしている。つまり、それらは一般的な臨床上の印象から、心理・社会的な各発達段階のあらすじの概観に向かい、最終的には、その特定の一段階、すなわち青年期の、もっと詳細な定義づけへと進むという具合に、心理・社会的発達をめぐる論議の的を次第にしぼっている。さらに今後の解明は、このようなやり方で研究された幾つもの生活段階相互の比較にその焦点を合せねばならない。また、これと同時に、人間のライフ・サイクル全体を理解するために、これらの諸研究を総合する方向に向かわなければならない。

別な専門分野の研究者たちは、私の文献目録の中に、私の諸概念が提出され論議された数々の協同研究の集まりでの発表原稿が参照されていることに気づかれるだろう。(Erikson *1951a, 1953, 1955a, 1955b, 1956c, 1958c*. Erikson and Erikson *1957*) 今日のように、学派や大陸を越えた口答の社会的コミュニケーションが、数々の書物による一人きりでの綿密な研究に、かなりの範囲とって代った時代には、適切な修正を加えられながらのある程度の重複は、避け難い。私の著作『児童期と社会』(*1950a*)『青年ルーテル』(*1958a*)は、私自身が臨床的なアプローチと応用的なアプローチの統合をどのくらい実現し得たかを問う意味をもっている。しかしながら、臨床的な精神分析医は、むしろも

っと最近の諸論文の中で私が、臨床的な事実（1954—1958b）や治療方法の諸問題を、新たに拡大されたわれわれの歴史意識の光に照らして熱心にとり上げはじめたことに気づくであろう。そしてこの観点からみてもまた、一臨床家のたどった道程の一局面を跡づける本書は、たしかに今までのところ、未だ今後の論議に多くが期待されるような心理学の課題を、提出しているといえるようである。

E・H・エリクソン

目次

序文……i
第一部　自我発達と歴史変動　臨床的考察……1
第一章　集団同一性と自我同一性……5
第二章　自我病理学と歴史変動……15
第三章　自我の強さと社会病理学……33
第二部　健康なパーソナリティの成長と危機……49
第一章　健康と成長について……55
第二章　基本的信頼対基本的不信……61
第三章　自律性対恥と疑惑……75
第四章　積極性対罪悪感……89
第五章　生産性対劣等感……101

第六章　同一性対同一性拡散……111
第七章　成人期の三つの段階……119
親密さと隔たり対自己吸収……119
生殖性対停滞……122
完全性対絶望と嫌悪……123
結　語……124
第三部　自我同一性の問題……129
第一章　伝記的研究　ジョージ・バーナード・ショウ（二十歳）を回顧するG・B・S（七十歳）……133
俗　物……139
騒音屋……139
悪魔的人間……140
第二章　発生的なとらえ方　同一化と同一性……145
第三章　病理誌的研究　同一性拡散の臨床像……161
崩壊の時……162
親密さの問題……164

時間的展望の拡散……166
勤勉さの拡散……168
否定的同一性の選択……171
転移と抵抗……176
家族および児童期における特殊要因……180
治療計画……183
もう一度図表に即して……184
第四章　社会的側面　自我と環境……195
要　約……215
附　録……217
第四部　精神分析的自我心理学の歴史的展望（デビィッド・ラパポート）……219
序　論……221
自我心理学発達の四段階……222
結　論……235
参考文献……237
注……247

訳注……259
解説……265
著作目録……278
訳者あとがき……283
索引……巻末

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第一部　自我発達と歴史変動

臨床的考察

本論文は、「児童の精神分析的研究」(The Psychoanalytic Study of the Child) 第2巻、pp. 359—396 (一九四六年)に収録されたものである。

民族、時代、経済活動を同じくする人びとは、善悪に関する共通のイメージによって導かれている。これらのイメージは、限りなく多種多様で、歴史変動のとらえにくさを反映しているが、それにもかかわらず、これらのイメージは、善悪の標準型 prototype を強制する現代社会の規範という形で、各個人の自我発達の中に、際立った具体性をおびて立ち現われる。ところが、精神分析は、この具体性に対応できるほどの理論的推敲を、未だ十分に達成していないし、歴史研究者たちも、すべての人間が母親から生まれ、一度は子どもになり、保育所の世話になり、社会は、子どもから親へと成長する途上にある人々から成り立っているという単純な事実を無視しつづけている。

つまり、精神分析と社会科学の緊密な協力によってのみ、はじめて、社会の歴史全体に織り込まれているライフ・サイクル life cycle を明らかにすることができる。そしてこの臨床的考察は、この目的のために、子どもの自我とその時代の歴史的標準型との関係について、問題を提起し、その具体的説明と理論的考察を試みるものである。

第一章　集団同一性と自我同一性

I

自我についての、そしてまた自我と社会の関係についてのフロイトの独創的な把握が、それでもなおあの当時の精神分析理論と、その時代の社会学的な諸公式に頼ったのは、やむを得ないことであった。たとえば、フロイト[訳注(1)]が、その最初の集団心理学的な考察に当って、〔フランス〕革命直後のフランスの社会学者ル・ボン Le Bon を引用したという事実は、人間たちの「集まり」multitude に関するそれ以後の精神分析的な論議に、大きな影響を及ぼすことになった。フロイト自身も認めていたように、ル・ボンの「大衆」masses とは、無秩序な社会、つまり社会進歩の二つの段階の間隙におこった無政府状態を楽しんでいる群衆、せいぜい、指導者によって導かれた群衆にすぎなかった。たしかにこのような群衆も実際に存在するし、その定義自体は、間違っていない。けれども、これらの社会学的な観察と精神分析的な方法によって確証された資料との間には大きな隔りがある。つまり後者は、二人きりの治療状況 a therapeutic situation à deux の中の転移・逆転移現象から再構成された個人史だからである。その結果生じた方法上のギャップは、「家族内－個人」individual-within-his-family（あるいは、あたかも「外界」に対する家族状況の投影によって取り囲まれているかのように見える個人）と人びとの「ばくぜんとした集まり」[注(1)]の中に埋もれてしまった「大衆内－個人」individual-in-the-mass との間の、人工的な区別を存続させることになってしまった。その結果、

「社会組織」social organization という現象もその概念も、そしてこれらが個人の自我に与える影響も、長い間「社会的諸要因」social factors の存在を礼讃することの陰にかくれて、見過ごされることになった。

そもそものはじめ、自我 ego の概念は、当時もっともよく知られていた二つの対立者である生物学的なエス id と社会学的な「大衆」mass に関する既存の定義を用いて記述された。つまり、自我は、その個人が経験を組織づけ理論的な計画を立てる中枢であり、原始的な本能の無秩序さと集団精神の無法さ双方からの危険にさらされていた。かつて、カント (Immanuel Kant) は、道徳的な市民の座標として「天上の星」と「内なる道徳律」をあげたが、[訳注(2)] 初期のフロイトは、自己の内なるエスと自分の周りを取り囲む群衆との間で恐れおののく自我をそこにおいた、ということもできよう。

群衆によって取り囲まれた人間の不確かな道徳性を説明するために、フロイトは、自我の内部に、自我理想 ego ideal または、超自我 Super-ego を設定した。ここでもまた、最初のうちは、このようにして自我に押しつけられる外的な圧力が強調された。フロイトによれば、超自我は、自我が従わねばならないすべての拘束の内在化である。つまりそれは、両親の、のちには教師たちの、さらには初期のフロイトにとって、「環境」や「世論」を構成する同時代の不特定の仲間的民衆 "die unbestimmte Menge der Genossen" であった人々の、[訳注(3)] それぞれの批判的影響によって、外部から子どもに強制されるものである。"von aussen aufgenötigt" (Freud, 1914)

そして、このような強力な非難に取り囲まれる結果、子どもに与えられた素朴な自分への愛情 self-love にみちた根源的な状態は傷つかざるを得なくなる、と言われる。そして子どもは、自分自身を評価するモデルを探し求め、そのモデルにあやかろうと努力することに幸せを見出そうとする。つまり、子どもは、この試みに成功すれば『自己評価』 self-esteem を得ることになるが、すでにこの自己評価は、子どもが本来もっていた自己愛 narcissism や万能感そのものではなくなっている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com